

‘예요’の語基論的意味

中 西 恭 子

1 はじめに

‘이다’の해요体について現行正書法は「標準語規定」で‘이에요’と‘이어요’をいずれも可と定めるのみ、母音語幹体言の後の[ejo]をどう表記するかについてはなんら規定がない。そのため、‘예요’か‘예요¹⁾’かをめぐっては少なからぬ議論があったが、국립국어원の方針に従い現在では‘예요’に統一されている。[ejo]の表記を‘예요’とするものは母音語幹体言の後で‘이-’が脱落²⁾するとみており、‘예요’とするものは‘이-’と‘예’が縮約して‘예’になるとの見解に立つものである。

本稿ではまず、先行研究の挙げる‘이-’脱落条件を批判的に検証し、次に[ejo]の表記としては‘예요’が適切との前提に立ったうえで、そのように表記することの語基論³⁾的意味について考えてみたい。以下の用例で出典を明記していないものは作例、またはネットからの引用である。

2 先行研究

まず、‘이다’の해요体に関する辞書類の記述をみていく。

“표준국어대사전(Web版)”には‘예요’での立項はなく、‘-예요’の項で次のように説明している。

- (1) <‘이다’나 ‘아니다’의 어간 뒤에 붙어> 해요할 자리에 쓰며, 설명・의문의 뜻을 나타내는 종결 어미.

(〈‘이다’や‘아니다’の語幹に付いて〉 해요体で説明・疑問の意を表す終結語尾)

そして「叙述格助詞」‘이다’の項では、注釈の形で次のような補足説明を行っていた⁴⁾。(下線は筆者)

(2) 모음 뒤에서는 ‘다’로 줄어들기도 하는데 관형형이나 명사형으로 쓰일 때는 줄어들지 않는다. 표준어 규정 제1부 26항에서 복수 표준어로 삼은 ‘이예요’와 ‘이어요’는 ‘이다’의 어간 뒤에 ‘예요’, ‘어요’가 붙은 말이다. ‘이예요’와 ‘이어요’는 체언 뒤에 붙는데 받침이 없는 체언에 붙을 때는 ‘예요’, ‘여요’로 줄어들기도 한다.

(母音の後では‘다’に縮約されることもあるが、冠形詞形や名詞形で用いられるときは縮約されない。標準語規定第1部26項で複数標準語とみなしている‘이예요’と‘이어요’は‘이다’の語幹に‘예요’, ‘어요’が付いた語である。‘이예요’と‘이어요’は体言に付くが、パッチムのない体言に付くときは‘예요’, ‘여요’と縮約されることもある)

“연세한국어사전”(1998/2007)では‘예요’と‘여요’をそれぞれ立項し、前者は‘어요’(해요体の終結語尾)に送り、「‘이다・아니다’の語幹の後に用いる」との注釈を付している。そして後者を「‘이예요’の縮約形。‘여요’の口語形」とする一方、‘여요’については「‘이다’がパッチムのない体言の後で用いられるとき、‘이다’の語幹‘이’に語尾‘어요’が結合した形である‘이어요’が縮約した形」と説明している。基本的な考え方は“표준국어대사전(Web版)”と同じである。

『コスモス朝和辞典』(1988)では‘예요’・‘여요’で立項し、これを「指定詞＋終止形直接法叙述形・疑問形上称」とし、後者の‘예요’を韓国の改訂正書法に沿った形としながらも、用例には“책이예요”, “아니예요”, “내 거예요”のようなものが挙げられている。これは結果的に母音語幹体言の後で‘예요’が用いられているとはいえ、指定詞‘이’に付く終止形語尾として‘예요’を設定するもので、

국립국어원ほかとはそもそもの前提が異なっている。

『朝鮮語辞典』(1993/1995)は‘에요’で立項し、「指定詞の語幹につく略体上称の終結語尾、母音体言の後では指定詞の語幹이が省略されることがある」とし、“저기 보이는 것은 호수예요, 바다예요?”(あそこに見えるのは湖ですか、海ですか?)のような用例を挙げている。‘에요’項目は‘에요’項目に送られている。

なお、同辞書の改訂版にあたる『韓日辞典』(2018)では、‘에요’の項目で「母音体言の後では指定詞の語幹이が省略されたり、이에요が縮約されて예요になることがある」とし、‘에요’と‘예요’の両論併記となっている。

次に研究論文であるが、‘이다’の「削除・省略」をテーマとした先駆的な研究としては이승재(1994)がある。同論文は母音語幹に‘이다’が結合した場合、後続する語尾によって‘이’が「削除・省略」される現象について、実際の言語使用に基づき記述したものである。

同論文は、母音語幹に結合しているにもかかわらず‘이’が「削除・省略」されないのは語尾が‘-기’, ‘-로’, ‘-니’, ‘-고’の時、すなわち冠形詞形語尾⁵⁾を含む名詞化の場合に限られ、その理由としては、そもそも‘이’は「名詞類」に叙述性を付加するものであるため、叙述性が確保される環境では「削除」されるが、名詞類が名詞化するためにはそれらがいったん叙述語にならなければならず、そのために‘이’は不可欠とした。そして「名詞化」では説明できない次のような用例での‘이’の「省略拒否」については、その理由を課題として残している。

(3) 이것은 신 포도이나 먹을 수 있다. (これは酸っぱい葡萄だが食べられる)

‘이’と‘어’の関係については記述がなく、‘에요’が‘예요’かについても明示的な言及はないが、‘이’「省略」形に‘에요’が含まれていないことから推して同論文も‘예요’説に立つものと思われる。

一方、‘예요’説に立つ主たる研究には油谷幸利(2003)がある。同論文では「第1類」から「第5類」という用言分類⁶⁾に基づいた語尾との接続形式や他の「指

定詞の語幹にのみ接続する語尾」との比較検証を経て、「‘에요’が確実に第5類であるのならば‘에요’と書くほうが合理的である」との留保は付したうえで、「指定詞にのみ接続する語尾の一種であるのならば‘에요’と書くほうが合理的である」と結論づけている。

ただその根拠のひとつとして同論文の挙げる、「‘김치입니다’が短縮されて‘김칩니다’になるのは、母音の後で指定詞の語幹‘이’が省略されたからであり、‘김치이에요’が短縮されれば‘김치에요’となると考えると、全く同じ原理で説明できる」との主張は、「丁寧」を表す‘하나다’と‘요’の意味機能に着目したものであるが、意味機能が同じでも音韻論的な理由等で脱落なり縮約が起こるということは十分あり得るわけで、傍証とはいえにわかに肯首しがたい。

近年の研究としては정희창・이선영(2017)を挙げるができる。同論文は標準語規定第26項で‘이에요/이어요’が複数標準語として提示されていることを前提に、次のように述べている。

- (4) 「パッチムがない体言と連結する場合、言語の現実では次のいずれもが可能である。

ㄱ. 누구+이에요 → ‘이에’ 축약 → 누구예요

ㄴ. 누구+이에요 → ‘이’ 탈락 → 누구예요

‘누구이에요’から縮約が起こるのか脱落が起こるのかは構造的に予測するのは難しい。この場合に規範的な解釈は‘이어요’を根拠に活用することである。‘이에요/이어요’が複数標準語だということは活用形でも規範的な解釈が並行しなければならない」

つまり、‘누구+이어요’で‘누구여요’は可能だが*‘누구어요’は不可能だということを根拠に、‘누구예요’か‘누구에요’でも縮約形の‘누구예요’のほうを規範形にすべきと主張しているわけで、非常に明解である。

3 ‘이-’の脱落・縮約

では実際に‘이-’はどういう環境で脱落し、または脱落しないのか。すでに先行研究で試みられてきた作業ではあるが、これまでの研究では網羅されていない語尾類⁷⁾もあり、あらためて‘이다’とそれらが結合したときの‘이-’の脱落有無を、語基ごとにまとめておく。

対象とする語尾類は、指定詞‘이다’との結合が可能なものに限定し、例えば‘-면’, ‘-로’, ‘-ㄴ’に準じる‘-면서’, ‘-므로’, ‘-ㄴ수록’など、または‘-라고’のように共時論的には助詞とみなし得るものは除外した。略体の終結語尾‘-야’についてはⅠかⅡか特定することはできないが、Ⅱの活用をすることはないため、一応Ⅰに分類しておく。

＜表1＞では、例外なく‘이-’が保持される「子音語幹+」のケースは省略し、「[母音語幹+」の用例」の欄には、脱落または脱落拒否に議論の余地のないものについては簡単な作例を1つ挙げるに留め、本稿のテーマに関わる語尾類の用例欄には、以下で検討する用例番号を記した。

＜表1＞ 語基・語尾類別‘이-’の脱落可否

語基	語尾類	母音語幹+	「母音語幹+」の用例
Ⅰ	-다	可	나다. (僕だ)
	-입니다	可	접니다. (私です)
	-야<略体>	可	나야. (僕だ)
	-거든	可	내 노트거든. (僕のノートだよ)
	-잖다	可	내 노트잖아. (僕のノートじゃないか)
	-지<確認>	可	이건 노트지 책이 아니다. (これはノートであって本ではない)
	-고	可	이건 노트고 그건 책이다. (これはノートでそれは本だ)
	-지만	可	이건 내 노트지만 네가 가져. (これは僕のノートだけど、あげるよ)

	-거나	可	책이거나 노트거나 상관없어. (本でもノートでもどちらでもいい)
	-건마는	可	잃어버린 지가 오래건마는 (無くしてから久しいが)
	-되	可	나무는 나무되 (木は木だが)
	-자<同時>	否	用例(5), (6)
	-지<否定>	否	用例(7), (8), (9)
	-기	否	그게 진실이기를 바란다. (それが真実であることを願う)
	-기에	可	친했던 친구기에 (親しかった友だからなので)
	-던	否	친구이던 철수 (友だちだったチョルス)
	-게	否	用例(10), (11), (12)
	-겠-	可	그게 문제겠어? (それが問題か)
II	-는데	可	난데. (僕だけど)
	-니가	可	그게 누군가? (それは誰か)
	-니까	可	우린 친구니까. (僕たち、友だから)
	-면	可	그거면 됐어. (それならいい)
	-며	可	이건 노트며 그건 책이다. (これはノートであり、それは本だ)
	-냐	可	너냐? (お前か)
	-오	可 ⁸⁾	用例(16), (17), (18)
	-나	否	用例(13), (14), (15)
	-로	否	커다란 성과임에 틀림없다. (大きな成果であることは間違いない)
	-니	否	어머니인 친구 (お母さんである友だち)
	-르	否	아마 내 노트일 거야. (たぶん僕のノートだ)
	-시-	可	누구세요? (どちらさまですか)
III	-요	否	노트예요. (ノートです)
	-라 ⁹⁾	否	자신의 교회이여라. (自身の教会たれ) 모두가 지도자여라. (誰もが指導者たれ)
	-서	否	휴가여서 한국에 간다. (休暇で韓国に行く)
	-도	否	보호자여도 못 들어간다. (保護者であっても入れない)

-야<強調>	否	순환사회여야 한다. (リサイクル社会でなければならない)
-ㅁ-	否	어제었어요. (昨日でした)

網掛けしたものが母音語幹体言の後でも‘이’が脱落しない、つまり脱落拒否のケースである。該当する語尾類のみ抜き出してみると次のようになる。

<表2> ‘이’脱落拒否の語尾類

I	-자<同時>, -지<否定>, -기, -던, -게
II	-나, -로, -ㄴ, -ㄹ
III	-요, -라, -서, -도, -야<強調>, -ㅁ-

이승재(1994)はこのうち、‘-기’, ‘-로’, ‘-ㄴ’, ‘-ㄹ’で‘이’が「省略」されない理由を名詞化に求め、‘-나’については(3)でみたように課題のまま残している。정희창・이선영(2017)が検証対象とした語尾もこの域を出ていない。残りの語尾類のうち冠形詞形‘-던’については‘-ㄴ’, ‘-ㄹ’に準じて理解するとして、これまで検証されてこなかった、あるいは先行研究が未解決のまま残した語尾類は<表3>のようになる。

<表3> ‘이’脱落拒否の理由が未解決な語尾類

I	-자<同時>, -지<否定>, -게
II	-나
III	-요, -라, -서, -도, -야<強調>, -ㅁ-

‘-자’については、‘이’脱落拒否が原則であるとはいえ、‘어머니자 친구’のような例も数多くみられ、助詞化が進んでいると考えられる。‘-자’を助詞とみた場合、子音語幹体言の後の‘이’は媒介母音ということになる。

ただ、次のような例で‘이’が脱落すると許容度が下がるのも事実である。

- (5) 본인의 영예이자 가문의 영광이다.¹⁰⁾ (本人の榮譽であり一家の栄光だ)
 (6) 웬만한 가정에서는 이 사전 한 질이 가장 귀한 가구이자 빛나는 가보였다. (それなりの家庭では、この事典ワンセットが最も貴重な家具であり輝かしい家宝だった)

これらの用例は次のように分析され、‘자’は‘본인의 영예이’, ‘가장 귀한 가구이’を内包文¹¹⁾とする副詞節を構成している。

- (5)’[[본인의 영예이]자 가문의 영광]이다]
 (6)’[웬만한 가정에서는 [이 사전 한 질이 [[가장 귀한 가구이]자 빛나는 가보]였다]]

次は‘지’であるが、通常‘이다’の否定には‘이/가 아니다’が用いられることから、‘이지 않다’という構文自体を否定する母語話者も少なくない。しかし実際には少なからぬ用例が確認される。

- (7) 이것은 말이지 소이지 않다. [李]¹²⁾ (これは馬であって牛ではない)
 (8) 그런 것만 보고 좋은 회사이지 않다. (そんなことだけ見ていい会社なのではない)
 (9) 전형적인 범죄영화이지 않다. (典型的な犯罪映画ではない)

(7)~(9)で否定されているのは‘소’, ‘회사’, ‘범죄영화’そのものではなく、‘소이’, ‘그런 것만 보고 좋은 회사이’, ‘전형적인 범죄영화이’である。これらは次のように分析される。

- (7)’[[이것은 말이]지 [[소이]지 않다]]
 (8)’[[그런 것만 보고 좋은 회사이]지 않다]
 (9)’[[전형적인 범죄영화이]지 않다]

通常なら用言がくるべき‘-지’の先行部分に、‘이-’によって叙述性が付与された節がきているわけで、‘-지’が内包文を導く副詞形語尾として機能していることがわかる。

次は‘-게’の用例である。

- (10) 자연으로 하여금 그대의 스승이게 하라. [981]¹³⁾

(自然をもってあなたの師匠とせよ)

- (11) 우리가 시에 있어서 주인이 되려면 시가 시이게 하는 본질적 요소이자 시가 가진 기능을 제대로 수행할 수 있는... [981] (我々が詩において主たらんと欲するなら、詩を詩たらしめる本質的な要素で、かつ詩のもつ機能を適切に遂行することのできる…)

- (12) 그것이야말로 이 불후의 사가로 하여금 진정한 사가이게 한 제1의 원리가 아닐 수 없다. [1005] (それこそこの不朽の歴史家をして真の歴史家たらしめた第一の原理と言うほかない)

これらの用例で、‘그대의 스승이’, ‘시가 시이’, ‘진정한 사가이’が副詞形語尾‘-게’に導かれる内包文であることは論をまたない。つまり‘-기’, ‘-로’, ‘-ㄴ’, ‘-ㄹ’などで脱落拒否を引き起こしているのは「名詞化」という意味機能ではなく、内包文という統辞論的要請であったとすることができる。終結語尾との結合ではその先行部分の叙述性は明らかであり、接続文にあっては後文との対等性に鑑み、連結語尾に先行する成分の叙述性は容易に推測される。それに対し内包文の場合、明示的な用言を欠いてはその叙述性を示すことはできない。‘-기’, ‘-로’, ‘-ㄴ’, ‘-ㄹ’などで‘이-’脱落が起こらないのはそのためであり、‘-자’, ‘-지’, ‘-게’についても同様に説明できる。

次に‘-나’の用例をみていく。

- (13) 이 일에 가장 적합한 사람은 순이이나, 이번에는 영이가 하도록 하자.
[李] (この仕事に最も適している人はスニではあるが、今回はヨンイがす

ることにしよう)

(14) 업계에서는 인정 받는 회사이나 … 아직 갈 길이 한참인 회사.

(業界では認められた会社ではあるが、まだまだこれからの会社)

(15) 재물운은 좋은 때이나 너무 여유를 부려서는 안 된다.

(金運がよい時ではあるが、あまり悠長に構えていてはいけない)

국립국어원ほか通説は‘나’を‘고’, ‘며’, ‘지만’などと同様、対等接続の語尾とみており、その先行部分を内包文とみることは難しい。なかでも「逆説」の‘지만’は、文語的か否かの違いを別にすれば意味機能的にも‘나’とまったく同じとされるが、その‘지만’で、‘가장 적합한 사람은 순이지만’, ‘업계에서는 인정 받는 회사지만’, ‘재물운은 좋은 때지만’のように‘이’脱落が起こる事実も、‘나’の解決を困難にしている。

‘나’はなぜ‘지만’とは異なる様相をみせるのだろうか。その理由としてまず考えられるのは、‘나’には‘지만’とは異なり「～や、～も、～でも」などの意を表す助詞もあり、‘이’が脱落することによって両者は混同をきたし得る。言語による伝達の重要性¹⁴⁾を思えば、この点が‘이’の脱落を拒否する心理に影響を与えている可能性が大きい。

ただ、それでもなお統辞論的な理由も否定できない。‘나’には動詞や形容詞との結合において、‘비가 오나 눈이 오나’(雨が降ろうと雪が降ろうと)、あるいは‘크나 큰 집’(大きくも大きい家)のような用法があること、また歴史的には「譲歩」の意味機能を担っていた¹⁵⁾ことなどを考え併せるなら、‘나’の機能を‘지만’とまったく同じ「逆接」とみてよいのかどうか疑わしい。仮に‘나’の機能が「譲歩」であれば、(13)～(15)のような‘나’は‘(기는 하)나’と解することができ、‘가장 적합한 사람은 순이이’, ‘업계에서는 인정 받는 회사이’, ‘재물운은 좋은 때이’は潜在的な‘기’に導かれた内包文相当の節と解することができる。

以上、‘나’については、伝達における誤解を回避しようとする心理によるものか統辞論的理由によるものかについて結論は下せないものの、Ⅰ、Ⅱをとる

語尾の‘이’脱落拒否には相応の理由があることはわかった。残るはⅢの語尾類である。

4 ‘이’の脱落・縮約と第Ⅲ語基

Ⅲの語尾類における‘이’脱落拒否の理由としてまず考えられるのは、これらの語尾類では本来、‘아/어’決定のための用言語幹が必須ということである。そして言語事実としてはおそらくこの説明に尽きるであろう。しかし‘이다’の해요体の終結語尾として近年、ある意味人為的に設定された‘에요’については事情が異なる。‘에요’は‘어’をすでに内在化しているため、‘아/어’を決する必要はない。

次に考えられるのが、‘이’と‘에(요)’は音韻論的に縮約が可能のため、脱落せずに縮約するという解釈である。しかしⅡの‘오’もまた‘이’との縮約が可能であるにもかかわらず、母音語幹体言の後で‘이’はしばしば脱落する。

(16) 누구오? (だれですか)

(17) 남자오 여자오? (男ですか、女ですか)

(18) 내 패배오. (私の負けです)

この脱落については、‘이’と‘오’の縮約形である略体上称形‘요’の存在ゆえに縮約が阻害され、子音ではじまる他の語尾のように(‘이’を保持しないのであれば)脱落させるほかない、との説明もあり得るだろう。では略体上称形‘요’が登場する以前の‘이’と‘오’はどのような形で現れるのだろう。15, 16世紀の文献では、母音語幹の後で‘이’が保たれるか脱落するかのいずれかである¹⁶⁾。以下に脱落の例を挙げる。

(19) 었데 일후미 般若(반야)오 (なぜ名前が般若なのか) <金강序¹⁷⁾>

(20) …아디 못하니라 하노라 었던 전초오 (わからないと言う。何ゆえか)

<金삼352¹⁸⁾>

(21) 흔 음식을 어드면 반드시 몬져 배 어버이를 머기느니 엇던 연고오

(食べ物を得たら必ずまずは親に食べさせるが、何ゆえか) <小學5:74b¹⁹⁾>

18世紀に入ると略体上称形ではない‘이-+-오’の縮約形‘요’が出現するが、その後も引き続き‘이-’脱落は確認される。

(22) 四體를 勤티 아니ㅎ며 五穀을 분티 몬ㅎ느니 닐 夫子오

(四体を勤めず五穀の見分けがつかずして、誰が夫子か) <論栗4:54a²⁰⁾>

(23) 또 디옥이 이시되 일홈미 떨거오 (また地獄があり、名は鉄車だ) <地藏中2a²¹⁾>

(24) 이제 역적 괴슈느 네 아니오²²⁾ (いまや逆賊の魁首はお前ではないか)

<闡義4:71a²³⁾>

つまり、略体上称形‘요’という阻害要因がなくても‘이-’脱落は起こってきたわけで、音韻論的に縮約が可能な場合であっても脱落は起こり得ることがわかる。

‘에요’という語尾は形態上、助詞等と紛れることもなく、‘-기’, ‘-로’, ‘-ㄴ’, ‘-ㄹ’などのように内包文を導くわけでもなく、音韻論的に縮約が必然というわけでもない。にもかかわらず母音語幹の後でそれが‘에요’でなければならないとすれば、‘이-’と‘어’を別個の形態素とみなさない語基論が説得力を帯びてくる。

伝統式と語基式を比較し後者の有効性を示した中西(2011)では、아/어’を略体下称形の語末語尾とみることによって生じる問題を指摘している。つまり、①아/어’が略体下称形の語末語尾で‘요’も語末語尾であるなら、略体上称形の‘아/어요’は語末語尾にさらに語末語尾が付いたことになり、②국립국어원의ように‘요’を文終結助詞とみた場合、‘이다’の해요体‘이에요’の‘에’が説明できない²⁴⁾。국립국어원은指定詞特有の‘에요’という語尾を設定することで②の解決を図っているといえよう。しかし‘먹어요’の‘요’は文終結助詞で、‘이에요’では‘에

요’が語末語尾という説明は整合性に欠ける。‘먹어요’の‘요’も‘이에요’の‘요’も機能は同じはずである²⁵⁾。

加えて本稿のテーマである‘이’の脱落・脱落拒否という観点を導入することで、またひとつ問題が浮上する。‘예요’が終結語尾で、上でみたような脱落拒否要因がないとすれば、‘다’, ‘-되니다’などと同様、母音語幹体言の後で‘이’脱落が起こってもいいはずである。この場合、表記は‘예요’となる。ところが국립국어원은、‘이’の脱落はあり得ないとして縮約形の‘예요’のみを正しい表記とした。‘이’と‘어’の分離を認めないこのような解釈は、‘아/어’を語幹の一部とみる語基論に立つてこそ整合性をもつ。‘이다’のⅢを‘이어’とする語基論で‘어’は活用した語幹の一部なので、‘어’だけ残して‘이’が脱落するということはある得ない。そのため、母音語幹体言に付く‘이다’の해요体も‘이에요’の縮約形たる‘예요’でなければならない、ということになる。

‘이’が、Ⅲをとる語尾との結合で、‘자’<同時>や‘오’のような揺れもなく一貫して保たれていることを思えば、母語話者の意識の中で‘이’と‘어’は不可分なものと認識されている可能性が高い。정희창・이선영(2017)の説明もそれを前提としたものである。油谷幸利(2003)は「‘예요’が確実に第5類であるのならば…」との含みをもたせていたが、[ejo]の[e]はまさに第5類(語基論のⅢに相当)だからこそ、その表記としては‘예요’が正しいと言えよう。

5 まとめ

語尾類の前で‘이’脱落拒否が起こるのは次の場合である。

(1) I II の語尾との結合にあつては

- ①内包文にあつてその叙述性を明らかにする必要がある場合
- ②同形の助詞と区別する必要がある場合

(2) Ⅲの語尾類との結合

朝鮮語の教育現場ではいまなお対立的に捉えられがちな伝統式と語基式であるが、こと‘이다’に関しては、母語話者も‘이어+요’, ‘이어+서’…のように考えていることが‘에요’と‘예요’を巡る議論から読み取れる。語尾によって叙述性が確保されている場合‘이-’はしばしば母音語幹体言の後で脱落するが、Ⅲの語尾類の前では叙述性が明らかで、なおかつ上に挙げたような拒否要因がないにもかかわらず、強い脱落拒否を示す。これは‘이-’と‘어’の関係が、「이-+<어+語尾>」あるいは「‘이-’+‘에요’(指定詞特有の語尾)」ではなく、「<語根이-+어>+語尾」であることを示唆している。

指定詞‘이다’の해요体をめぐる矛盾や無理な説明を解消するためには、用言活用の一形態として、少なくともⅢにあたる活用形を認めることが有用であろう。そうではなく、あくまでも‘이-’+‘에요’であるとするなら、母音語幹体言に付く[ejo]の表記に、‘김치다’, ‘김칩니다’同様‘에요’もまた許容されてしかるべきである。

参考文献

- 李姫子他(2010)『韓国語文法 語尾・助詞辞典』スリーエーネットワーク
菅野裕臣他編(1988)『コスモス朝和辞典』白水社
中西恭子(2011)「韓国語の文法教授法に対する一考察 ―伝統式と語基式―」『人文論叢』59, 1-16
橋本進吉(1948)『国語研究法』岩波書店
油谷幸利(2003)「이다の省略と縮約 ―에요か예요か―」『朝鮮學報』189, 1-15
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編(1993/1995)『朝鮮語辞典』小学館
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編(2018)『韓日辞典』小学館

국립국어연구원(1999), “표준국어대사전”, 두산동아.
국립국어원(2005a), “한국어 문법 1”, 커뮤니케이션북스.
국립국어원(2005b), “한국어 문법 2”, 커뮤니케이션북스.
남기심・고영근(1985/1997), “표준국어문법론”, 탑출판사.
백봉자(2006), “한국어 문법 사전”, 하우.
안병희・이광호(1990/1998), “중세국어문법론”, 학연사.
언어정보개발연구원(1998/2007), “연세한국어사전”, 두산동아.

- 이관규(2008), “학교 문법론”, 월인.
 이승재(1994), “-이-의 삭제와 생략”, “주시경학보” 13, 14-28.
 이억섭(2003), “국어 부사절의 성립”, 태학사.
 이억섭·채완(1999/2002), “국어문법론강의”, 학연사.
 정희창·이선영(2017), ‘국어 준말의 규범적 분석’, “한민족문화연구” 56, 361~382.
 홍종선 외(2006), “후기 근대국어 형태의 연구”, 도서출판 역락.

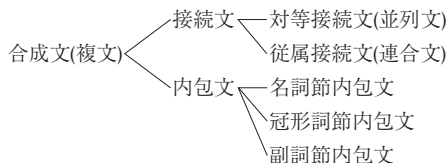
표준국어대사전(Web版) : <http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>

세종말뭉치 : <https://ithub.korean.go.kr/user/guide/corpus/guide1.do>

註

- 1) ‘-에요/예요’는語頭に立つことがないため、発音はいずれも[ejo]となる。
- 2) 「省略」「削除」などの用語で呼ぶ先行研究もあるが、本稿では「脱落」とする。但し、引用に際しては先行研究の用語に従う。
- 3) 例えば日本語で「yom-u」の語幹「yom-」が、語尾「-nai」との結合に際しては「yoma-」となり、語尾「-masu」では「yomi-」となるように、朝鮮語でも語尾類によって語幹の形態が変化するという考え方に基づく文法理論で、活用形を第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基(以下、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと略記)の3種類に分けて説明する。
- 4) この箇所は、本稿執筆中の2018年8月に削除された。下線部の説明の不十分さと、‘-에요’, ‘-여요’への縮約が任意とも読めることなどが理由ではないかと考えられるが、‘-이-’の縮約に対する 국립국어원의考え方がよくわかる部分なので引用した。「標準語規定」以下は紙媒体の“표준국어대사전”(1999)にも同様の記述がある。
- 5) 同論文では「動名詞形語尾」。
- 6) 1類：語幹に接続する形は一定。2類：母音語幹およびㄷ語幹に接続する形と子音語幹に接続する形が別形になることがある。ㄷ脱落あり。3類：子音語幹に接続する形が母音語幹接続形の前に-으-を加えた形。ㄷ脱落あり。4類：3類と同じ。但しㄷ脱落なし。5類：-아[-어]で始まる語尾。1類はほぼ語基式のⅠ、5類はⅢに当たる。2, 3, 4類は語基式のⅠ, Ⅱを、ㄷ脱落の有無、不規則活用などによって細分化したもの。
- 7) 本稿は語基式に基づいており「過去」の接尾辞-ㅆもここに含まれるため、語尾「類」とした。
- 8) 이승재(1994)は‘이것은 우리 집 [소오, 소이오].’のような例を挙げ、‘소오’は適切な例とは言い難いと述べている。しかし後述するように、‘소오’の前でも‘이-’脱落は問題なく起こる。
- 9) 直接命令の‘Ⅲ-라’。引用命令では‘Ⅱ-라’となるが、‘이-’のⅡが‘-라’と結合するケースは想定し難い。
- 10) 『朝鮮語辞典』(1993/1995)より引用。
- 11) 「内包文」の定義については諸説あるが、それは副詞節をどう分類するかという問題に

かかわっている。이익섭(2003)は次のような分類を通説としながらも「従属接続文」の設定には否定的な見解を述べている。



- 12) 이승재(1994)より引用。以下[李]とする。
- 13) 「現代文語」「形態意味分析」という条件で‘이게’を検索した국립국어원의言語情報公開サイト‘세종말뭉치’の通し番号。(11), (12)も同じ。
- 14) 言語における伝達の重要性を指摘する言語学者は多いが、例えば橋本進吉(1948,2)では「言語は、一定の音声に一定の意義が結合したもので、人々が自己の思想を発表し、他人に知らせる為の手段として用いるものである」とし、その重要性を説いている。
- 15) 안병희·이광호(1990/1998)では「讓歩」の語尾として‘-오되’, ‘-거니와’などとともに‘-나’を挙げている。‘德 심고물 하나 난비 너기샤’ <月釋10:4> (德を植えたものの快く思われず)。同書はこれらの語尾のうち‘나’については「現代語の用法そのままである」とも記している。
- 16) これらは疑問法語尾で、厳密な意味で現代語の‘-오’と同一視することはできないが、同じ終結語尾であり音韻論的な比較は可能であろう。홍종선 외(2006)によれば、現代語と同じ終結語尾‘-오’の平叙文が登場するのは18世紀中葉以降である。
- 17) 『金剛經諺解』(1464)
- 18) 『金剛經三家解』(1482)
- 19) 『小學諺解』(1587)
- 20) 『論語栗谷先生諺解』(1749)
- 21) 『地藏經諺解』(1752)
- 22) 先行体言の語末母音が[i]の場合はこの例に限らず‘-이’脱落が一般的である。
- 23) 『闡義昭鑑諺解』(1756)
- 24) 中西(2011)では「これ(백봉자<2006>)に拠れば、-어/아/여も -어/아/여요も「終結語尾」である。ところが同書で해요体は「非格式体パンマル-어/아/여に終結語尾-요が付いたもの」(38頁)と説明されている。つまり-요も「終結語尾」というわけである。終結語尾に終結語尾が付くということの矛盾がこれまでほとんど指摘されてこなかった」、「국립국어원(2005b)は-아を連結語尾(510頁)と終結語尾(512-514頁)に分け、요を助詞(589頁)とする(但し文中の요は連結語尾)。同様の見解は이관규(2008)や 李姫子他(2010)にもみられ、前者は요を「補助詞」とし、補助詞には文成分にも文末にも付く「通用補助詞」がある

- とする(147頁)。後者は요を「文終結助詞」とする(639頁)が、いずれも요を語尾ではなく助詞とみる点では共通している。確かに요が(終)助詞であれば-아/어-との関係は問題なく説明されよう。しかし、이에요/예요の場合はどうか。이에요/예요の요と、例えば먹어요の요は機能的に同じはずだ。이에요/예요の이에/예は何なのか。命令形-아/어라의-라도然り。-라도助詞とはいえないであろう。국립국어원(2005b)では-에요(575-576頁)、-아라(524-525頁)の形で終結語尾として処理している。이관규(2008)で-어라는「命令形語尾」(155頁)、李姫子他(2010)も終結語尾(578頁)である。いずれも-어/아요の場合との関連が考慮されておらず、一貫性に欠く説明といわざるを得ない」との指摘を行った。
- 25) (韓)国語学の代表的な教科書とも言える남기심・고영근(1985/1997)、이익섭・채완(1999/2002)でも、前者は「待遇法による終結語尾の体系」という一覧表に해요体として-어요が挙げられているにすぎず(157頁)、後者でも「パンマル体語尾に-요を付け足した語尾である-아요/어요」(360頁)との言及があるのみで、この辺りの記述は曖昧である。